
ファンタ爺

軽助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンタ爺

【Nコード】

N1679D

【作者名】

軽助

【あらすじ】

退職間近の56歳。山田聡一郎は、会社帰りに奇妙な黒猫とである。それは、彼の第二の人生のプロローグだった。

悪くはない人生だった――

半世紀にも及ぶ過去の記憶を振り返って、そう思う。

わたしの名は、山田聡一郎。年齢は五六歳。

日本人の平均寿命まで、あと二〇年くらいあるが、わたしの中では、すでに人生の大半が終わってしまったかのような、木枯らしじみた寂寥感が漂っていた。

二人の息子は大学を卒業して、無事に就職した。長年付き添ってくれた妻には、昨年、先立たれてしまった。突然の脳卒中である。悲しむ余裕すらなく、通夜と葬儀は終わった。つつがなく。

家のローンは少し残っているが、わずかな貯蓄を切り崩さなくても、退職金を当てれば返済できるだろう。還暦まであと四年。その後は慎ましい年金生活が始まり、やがてそれも終わる。

人生を映画に例える人は多い。

わたしの場合、すでに本編が終わり、エンドロールが流れている場面ではなからうか。

客席の人々がぼりぼりと立ち上がり、会場の余韻が抜けていく。

人々が小声で、不満そうに感想を囁き合う。

―― 退屈なB級映画だったね。

会社の同僚の中には、退職後を第二の人生と位置づけ、新しい商売を計画したり、悠々自適な生活を夢見たりしている者たちもいる。とても前向きな人たちが。

だが、独りになってしまったわたしには、想像することができない。

生きるための「情熱」が、何故か沸かなかった。

だから今、この瞬間に五六年の生を終えたとしても、なんら悔いは残らないだろう。幽霊になって、自分の死体を見下ろしながら、

「おつかれさん」と、気軽に声をかけることができるだろう。

「……中高年の自殺が多いというのも、頷けるなあ」

思わず口に出してしまい、それからわたしは苦笑した。

自殺などをしたら、息子たちや会社に迷惑がかかってしまう。「立つ鳥跡を濁さず」ではないが、最後の幕を破るような暴挙は慎みたいところ。人は簡単に死んでしまうが、簡単には死ねないものだ。――一月三〇日。午後九時過ぎ。

このところ急激に気温が下がって、早くもインフルエンザが流行し始めているというニュースが流れていた。わたしは仕事を終えると、いつもの電車に乗り、それから徒歩三〇分の帰路についていた。千葉県北部の住宅地――からも離れた、静かな田舎道である。

頭上には星ひとつない黒い空。片手には駅前のスーパーで買ったお惣菜の袋。スーパーの店内には気の早いクリスマスソングが流れていた。

そして目的地は、誰もいない我が家。

夕食をとり、風呂に入って眠れば、また今日とよく似た日常が繰り返される。明日も明後日も、クリスマスも同じ一日だ。人生を振り返って、その虚しさを噛み締めるには、絶好の環境シチュエーションといえるかもしれない。

こういう時は、思考を滑らせるのがいい。

馬鹿正直に悩んで傷つくのは、子供のすること。自傷行為だ。大人は悩まない。棘のある思考を、心の表面に沿って滑らせる技術を身につけている。誰もが、無意識のうちに実行している。

肌寒さに身を震わせながら歩いていると、寂しく瞬く街灯の下に小さな影があった。

前足と後ろ足をたたんでこちらを見上げている、それは黒猫だった。

首輪をつけていないから、野良猫だろう。住宅街から離れたこんな場所に、珍しい。

猫も犬も、人から離れては生きていけない動物になってしまった。

それは進化なのか、あるいは退化なのか。地球に一番影響を与えている動物が人間ならば、その人間に依存することは、自然に依存するよりも確かだということなのか。少なくとも、森や山などの住処を失い、迷い出た人里で撃たれる熊や鹿などよりは、種としての生存率は高そうである。

猫を可愛がろうとして近づいて、逃げられると、とても悲しい。

だからわたしは、興味のないふりをして、まっすぐに歩いた。

「ナー」

黒猫は逃げなかった。

赤っぽく見える奇妙な色をした相貌で、わたしを捉えていた。

まれに、こういう猫がいる。警戒心もなく人間に近づき、媚びたように鳴いて頭を擦りつけ、餌をねだることができる賢い猫が。

おそらく、わたしの手にあるビニール袋の中身に期待しているのだろう。

期待には答えたほうがいい。わたしは腰を屈めると、ビニール袋の中からお惣菜のパッケージを取り出した。

一〇種類以上もの食材が入った筑前煮である。鶏肉も入っている。栄養バランスのとれた餌を前にしても、黒猫はぴくりとも動かなかった。

おかしい。餌が目当てでない猫などいるのだろうか。いるとするならば、ちよつとした奇跡だ。

「お腹は空いてないのかい？」

小さな頭を撫でようとしたところで、わたしの手は止まった。

血のような赤……。

一般的な猫の目というのは、何色だろう。黄色か青、茶色といったところか。

だが、この猫の目は見事なまでの赤色なのである。もう少し鮮烈に「真紅」と表現してもよい。瞳の色はさらに濃くした赤。おはじきを斜めから見たような流線型。

人気のない暗闇に、赤い目をした黒猫。

悪魔の、使い？

そんな陳腐な言葉が連想されたが、その連想に伴う恐怖はやってこなかった。

怪我をしている様子はない。おそらく、突然変異の目を持った黒猫なのだろう。

自分の中で現実感を帯びた考えを大きくして、妄想じみた想像を包み込む。無意識のうちに、わたしはそういつた思考作業を行う傾向にあるらしい。亡き妻に言わせると、「夢のない人」ということなのだそうだが……。

わたしは黒猫の頭に出した手を下げて、その喉元をくすぐろうとした。

こうすると猫は喜ぶ。数少ないこの世の真理だ。

黒猫は赤い目をわずかに細めて、

「——ッ！」

がぶりとなたしの指に噛みついた。

猫は雑食。野良猫ならば常に空腹。だが、筑前煮に入っている鶏肉を差し置いて、わざわざわたしの指に噛みつくとは、いったいどういう了見なのだろうか。

この猫は、何を考えている？

痛みすら忘れて、わたしはこの黒猫の奇妙な行動をまじまじと観察してしまった。

猫の歯は鋭い。指先から血が滴り落ちる。

「ナー」

やがて……黒猫は私の指を解放すると、その血をぺろぺろと舐め出した。

血はなかなか止まらない。

猫の舌はざらざらしている。

「……」

なんと表現すればいいのだろうか。

そう——シユールな光景、だろうか。

昔、何かの本で読んだことがある。血液は非常に栄養価の高い飲み物らしい。ミネラルや鉄分も豊富だし、そもそも母乳だって、血液から精製されるのだ。

では何故、血を飲まれるという光景に、生理的な嫌悪感を感じてしまうのだろうか。

吸血鬼や吸血蝙蝠といった負のイメージが、頭の中に刷り込まれているからか。それとも、生きながらにして身体の部品を食されるという光景が、生に対する原始的な危機感を生じさせるのだろうか。とりとめのない思考に身を委ねているうちに、猫は血を舐める行為を終えた。おちよこ一杯分くらいは飲まれただろうか。

黒猫はわたしの顔をじっと見上げて、ひと声。

『奇妙な人間です、あなた』

小さな口から可愛い言葉が漏れた。

いや。頭の中に直接響いた、ような気がした。

「……奇妙なのは、君だ」

そう言い返そうと思ったが、できなかった。

頭の中に霞がかかり、同時に強烈な睡魔が襲いかかってきたのだ。これほどの睡眠欲は、久しぶりである。学生時代以来ではないだろうか。子供は成長するために眠るが、大人は身体を休めるために眠る。だから、それほど睡眠は必要はないはず、なのに……。

思考が途切れる前に思ったことは、身体の心配だった。

犬に噛まれると、狂犬病になる場合があるらしいが、猫にはそういった病気があるのだろうか。

あるとすれば……ウツウツウツウツウツウツ狂猫病？

とても、言にくい。

アスファルトの冷たい感触を最後に、わたしは意識を手放した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1679d/>

ファンタ爺

2011年1月18日17時11分発行